
Love letter

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love letter

【Zコード】

N9074A

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

八年ぶりに届けられたのは、兄・一至の死だつた。彼が自分に遺したというものを受け取るために、一美花は兄の友人・日高とともに一至の暮らしていた街へと向かう。たつたひとつ、確かめたい想いを胸に秘めて。【第一回ポケスペ小説大賞応募作品】

1 蝶時雨（前書き）

この作品は第一回ポケスペ小説大賞応募作品です。参加期間中、あたたかなご声援を下さったすべての方に、改めてお礼を申し上げます。

お兄ちゃんが死んだ。

あたしとは十歳違いのお兄ちゃんだった。優しくて、年の離れた妹を邪険にしたりせず、よく面倒を見てくれた。絵が巧くて、いつもスケッチブックに何か描いていたのを憶えている。

お兄ちゃんは、あたしが八歳のときに家を出でていった。

当時高校三年生だったお兄ちゃんは、大学進学のことでお父さんと揉めていた。お兄ちゃんは絵の勉強をするために美大に行きたがっていたんだけれど、お父さんはそれを許さなかつた。

結局お兄ちゃんはお父さんと大喧嘩をして、高校卒業と同時に家を飛び出した。

それ以来、お兄ちゃんとは会っていない。

何度かあたし宛てに絵はがきが送られてきた。お兄ちゃんの絵が描かれた、あたしへの絵はがき。文章はいつもちよこっとで、「元気か?」だと、そんな決まり文句のようなものばかりだつた。だけど、すごく嬉しかつた。

お兄ちゃんが文章を書かない分、あたしは便箋を何枚も使って返事をした。あたしはお兄ちゃんと違つて絵の才能なんてなかつたから、その代わりに言葉でいろんなことを伝えようとした。あたしのことだけじゃなく、お父さんのこと、お母さんのこと、友達のこと。お兄ちゃんに、少しでも知つてほしくて。

それがちゃんと伝わつたかどうか　あたしにはわからない。

お兄ちゃんが出ていつて八年。ようやくお兄ちゃんは帰つてきた。死という、だれも望んでいなかつた形で。

蝉が鳴いている。

お兄ちゃんは蝉の声が嫌いだった。ずっと聞いていると、無性に悲しくなつてくるんだと言つていた。夏の間だけの短い命を震わせて鳴くよつた声が、耳の奥にこびりついて離れなくなるんだって。

今なら、その気持ちがわかるよつた気がした。

焦げつゝよつた陽射しのなか、あたしは汗を拭つこともできず、じつと立ち尽くしていた。隣に並んだお母さんがすがりつくよつともたれかかってきて、肩が重い。お母さんは反対側に立つお父さんは、きゅつと唇を引き結び、田の前の光景を睨むように見つめていた。

真つ白な棺が黒い靈柩車に運びこまれていく。お兄ちゃんを火葬場まで送るために。

お兄ちゃんの葬儀は我が家で執り行つた。お父さんとお母さんが、最後はせめて家から送り出してやりたいと言つて。

葬儀には想像していたよりもたくさんの弔問客が訪れた。親戚以外にも、お兄ちゃんの同級生やお世話になつたつていう学校の先生が、お兄ちゃんを見送るためにやつてきてくれた。

やがて靈柩車の扉が閉まるとい、パーンと甲高くクラクションが鳴つた。出棺の合図に、蝉の声にまぎれるよつて響いていたすすり泣きが大きくなつた。

お母さんが肩を震わせてますます強くしがみついてくる。引き絞るよつた嗚咽が細く聞こえた。

お兄ちゃんの死に顔を思い出す。まるで気持ちよさげに眠つているだけのよつた、穏やかな表情を浮かべていた。あたしのなかにいる十八歳のお兄ちゃんよりもずっと大人びていた。だけど、確かにあたしのお兄ちゃんだった男の人。

ねえ、お兄ちゃん。

なんで死んじゃつたの。なんで生きていらううちに帰つてくれなかつたの。なんで、なんで、なんで。

靈柩車が走り出した。もう一度と田覚めることのないお兄ちゃんを乗せて。

黒い影が門を抜け、みるみるうちに小さくなつていく。陽炎のよつにアスファルトから立ちのぼる熱に姿を揺らめかせながら、あたしたちから遠ざかつていった。

「行つたな……」

お父さんがぽつりと呟いた。その横顔は、一気に何十歳も老けこんでしまつたようだつた。

「……俺たちも行こいつか。こつまでも」「で」「うじてゐるわけにはいかないからな」

お父さんの言葉に、あたしは頷くことしかできなかつた。のろのろと見送りの人々が動き出す。あたしもお母さんと一緒に家の中に戻ろうと踵^{きびす}を返した、そのとき。

「二美花ちゃん」

名前を呼ばれた。

振り返ると、そこにはお兄ちゃんと同じ年頃の男の人立つていた。ひょろりと背が高く、癖つ毛のせいか整えているはずの髪がぼさぼさのように見えてしまつ。

「日高さん……」

お兄ちゃんの大学時代からの友人だつていう人。あたしたちにお兄ちゃんの死を知らせてくれたのが彼だつた。

「なんですか？」

「うん、ちょっと……話があるんだ」

話？

怪訝に思つて眉をひそめると、日高さんは困つたような顔をした。なんて切り出せばいいのか戸惑つてゐるように見えた。

「二美花に話とは、なんですか？」

あたしと日高さんの間にお父さんが割つて入つてきた。その顔は、怯えるような警戒心に強張つてゐる。

日高さんはお兄ちゃんの死を知らせてくれたけれど、それだけの人だ。お兄ちゃんが死んで、お父さんは家族に対して過敏になつていた。

だけどあたしは、日高さんはそこまで心配しなくちゃならないような人だとは思えなかつた。信頼というほどじゃないけれど、少なくともあたしに対してよからぬことをするとは考へてもいなかつた。会つてたつたの一日だけれど、そう感じさせた人だつた。何より……あのお兄ちゃんの友達なんだから。

日高さんは頭を搔くと、おもむろに口を開いた。

「一至から、頼まれてたことがあるんです」

「お兄ちゃんから？」

お父さんが小さく息を呑み、お母さんがぴくりと肩を揺らしたのが、気配で伝わってきた。

「一至が……何を？」

「あいつが、結婚をしてるの？」存じでしたか？」

あたしは目を瞬かせた。

お兄ちゃんが 結婚？

「やつぱり……あいつ知らせてなかつたんですね」

あたしたちの顔に驚きが浮かんだのを見て、日高さんは苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。

「一至が……」

あたしの肩から顔を上げたお母さんが、茫然と呟く。日高さんは大きく頷いた。

「だ、だが、結婚してたつてこつなら、どうしてその人は葬儀に来なかつたんですか！」

噛みつくようにお父さんが声を上げた。

確かにそうだ。お兄ちゃんの奥さんならば、彼女こそがお兄ちゃんの死を伝えにここへ来るべきなんぢやないのだろうか。

日高さんは表情を曇らせた。

「彼女は 綾羽さんは今、入院してるんです。もともと病気がちだつたんですけど、一至が死んでからは病状が悪化して……」

「そんな……」

「『本当は自分が行けたら一番いいのに、一至の『家族には本当に

申し訳ない』と語りました

日高さんの言葉に、あたしたちは何も言えなかつた。

「それで……一至から、伝言を。——『一美花ちゃんに』

お父さんとお母さんがもう一度、じぼれ落ちんばかりに田を壁つた。

あたしは思わず両手を握りしめた。

「一美花だけに、ですか？ 家族全員にではなく？」

「はい。あいつから、一美花ちゃんに。『渡したいものがある』と『渡したいもの……？』

あたしが首を傾げると、日高さんは頷いた。

「それがなんのか俺も知らないんだ。ただ、今は綾羽さんがそれを預かってる。一至はきみに、綾羽さんのといひまで取りにきてほしいって」

あたしは『一くんと睡を飲み下した。

お兄ちゃん、あたしに渡したいものって何？ あたしに綾羽さんと会つてほしいの？」

お兄ちゃん。

「どうする？」

日高さんが真剣な表情で訊いてくる。

「一至は、きみに全部任せることで語つてた。取りにいくのもいかないのも、きみの自由だつて。ただ、綾羽さんはきみが来るのをずっと待つてる」「待つてる」

蝉の声が遠い。額に滲んだ汗が頬を伝い落ちていくのが、やけにはつきりと感じられた。

「行くなら、俺が連れていくよ。……どうする？」

……お兄ちゃん。

もう会えない。手紙にこめたあたしの想いが伝わったかどうか、もう確かめられない。

だから。

だからせめて。お兄ちゃんの遺したものを、この手で受け取りた

い。

お兄ちゃん。

「行きます」

田畠さんの顔をまつすぐ見つめて、あたしは答えた。

「行きます。お兄ちゃんがあたしに渡したいっていつものを取りこ
綾羽さんに、会いに」

だから。

「連れていくへべたさー。あたしを、綾羽さんのいいいまだ

お兄ちゃんの絵を描く姿が好きだった。

お父さんやお母さんに隠れてこいつそり練習してこるので、よく隣で見ていた。睨むように紙面を見つめるまなざし。スケッチチブックを抱えて、ちょっと丸まつた背中。絵を描くとき、お兄ちゃんの周りの空気はぴんと張り詰めて、とても静かだった。聞こえるのはお兄ちゃんが鉛筆を走らせる音だけ。

真っ白な紙に鉛筆の纖細な線が刻まれて、ひとつ一つの形を浮かび上がりせていく。まるで魔法のようだつた。

何度もかたしの絵を描いてつねにねだつたことがある。だけど小さかつたあたしは長時間じつとしてじることができず、すぐに動いてしまつので、お兄ちゃんはあまりあたしをモニターにしたがらなかつた。

じゃあ一美花が大きくなつて、ちやんとおとなしくしてられるよつになつたら描いてやるよ

お兄ちゃんは苦笑混じりにうつむつと、あたしの頭を撫でた。
その約束が果たされることな、もうない。

「ちやん……一美花ちゃん」

だれかが呼んでいる。

あたしは田を開けると、ほんやつと田の前にある顔を見つめた。

「田高さん……？」

「寝てるとこ、『めんね。もつすぐ降りるから』」

向かい側の座席に座つてこいる田高さんは、軽く前に乗り出すような姿勢であたしの顔を覗きこんでいた。ちょっと長めの前髪に隠れるがちな双眸が、困ったように細められてこる。一瞬、夢のなかで見

たお兄ちゃんの表情が重なつた。

田高さんつて、苦笑いの仕方がお兄ちゃんに似ているかもしだい。覚醒しきっていない頭の隅でそんなことを考えていると、不意に気がついた。

顔が近い。

何げなくなんだろうけれど、近い。だつて田高さんの睫毛がはっきりとわかつてしまつ。

眠氣が一気にぶつ飛んだ。

「つー？」

あたしは座席の背もたれの存在を忘れて思いつき後退つた。次の瞬間、後頭部に鈍い衝撃。

「だ、大丈夫！？」

頭を抱えて呻くあたしに、田高さんは慌てたよじに声をかけた。

「大丈夫です……」

涙目になりながら、あたしはなんとか頷いた。

あたしは田高さんとともに、名前も知らないローカル線の電車に乗つていた。行き先は、お兄ちゃんが暮らしていた街。

お兄ちゃんの葬儀のあと、渋るお父さんとお母さんを無理やり説き伏せた。翌朝、夜も明けないうちに家を出て新幹線に乗り、それから何本も電車を乗り継いで。車窓の外に視線を向ければ、とっくに陽は沈み、流れていく景色は夜の闇に染まりつつあつた。

今は夏休みだから学校の心配はない。お兄ちゃんがあんなことになつたから、休みに入る前に約束していた友達との予定もすべてキャンセルしていた。

「……お兄ちゃんの奥さんつて、どんな人ですか？」

気になつていたことを訊いてみた。

すると、田高さんは一瞬、なんとも言えない複雑な表情を浮かべた。

え？

「綾羽さん、か……」

どこか遠くを見つめてこぼすような、小さな聲。日高さんは目を伏せると、うつすら微笑んだ。

「病気がちつていうのは言つたよね。子どもの頃からずっと入退院をくり返してたって。そのせいかな。物静かで、穏やかな性格の人だよ」

あたしは思わず日高さんを凝視した。あの顔はいったいなんだつたんだろうか？

「一至とはやっぱり病院で出会つたって言つてたな。あいつがたちの悪い風邪引いて短期入院したときに、知り合いになつたって」

お兄ちゃんが、入院。心臓がどきりと跳ねた。

お兄ちゃんは病氣で死んだつて日高さんが言つていた。発見したときには、もう手の施しようがない状態だつたつて。

綾羽さんはどんな気持ちだつたんだろう。お兄ちゃんの命が残り少ないつて知つたとき。

日高さんは続ける。

「あいつが退院してからも、たびたび会つてたみたいだつた。……

絵のモデルを頼んだり

「お兄ちゃんが？」

脳裏をあの約束がよぎつた。もう一度と果たされない約束。

胸の奥が痛い。針に突かれたような痛みはたちまち広がつて、あたしの心を痺れさせていく。

「そうですか……」

どうして胸が痛むのか、声が震えそうになるのか、わからない。あたしはそつと目を閉じた。

お兄ちゃん。

お兄ちゃんは、綾羽さんが好きだつた？ 愛していた？

……当たり前じゃないか。

好きだつたから、愛していたから、結婚したんだろう。それなのに、なんで今更そんなことを考えるの？ わからない。

だけど、ひとつだけ。

あたしは打ちのめされていた。どうしようもない、この事実に。閉じた瞼越しに日高さんの視線を感じる。何かを問い合わせてくるような、物言いたげな視線。

あたしは彼の視線から逃げるよう目を閉じ続けた。どうしてか、日高さんの瞳を見ることが怖かった。

結局あたしが再び目を開いたのは、目的の駅に着いてからだった。

3 心の行方

お兄ちゃんがあたしの本当の『お兄ちゃん』じゃないって知つたのは一年前、十四歳のときだつた。

本当に偶然だつた。たまたまお父さんの献血手帳を見たときあたしは目を疑つた。

献血手帳に記されていたお父さんの血液型は、A型だつた。

あたしとお母さんはO型。お兄ちゃんは、B型。

A型とO型の夫婦からは、A型かO型の子どもしか生まれない。現にあたしはO型だ。だけビ、お兄ちゃんはB型だつた。

あたしはそれまで、お父さんはお兄ちゃんと同じB型だと思つていた。他ならぬお父さん自身がそう語っていたのだ。

これは、いつたいどうこいつこと？

あたしはお父さんとお母さんを問い合わせた。はぐらかそつとするふたりと口論にまでなつたけれど、結局向こうが折れて真実を教えてくれた。

お兄ちゃんは養子だつた。あたしが生まれるよりもずっと前、なかなか子どもに恵まれなかつたお父さんとお母さんが、どうしても子どもが欲しくて、身寄りのなかつた孤児の少年を引き取つた。だからあたしとお兄ちゃんの間に、血のつながりは一切ない。

死ぬかと思つた。

呼吸の仕方を忘れて、このまま窒息死するんじゃないかと思つた。もしくは、心臓が止まつてしまつんじやないかつて。

だつて、兄妹じやない なんて。

足元から地面が崩れて、深い闇の底に落ちていくよつた氣分だつた。十四年間疑いもせず信じていたものが、積み木の城を崩すように、あつけなく壊れていつた。

子どもだつたあたしから見ても、お兄ちゃんと、お父さんとお母さんの関係は、どこかぎこちなかつた。不仲というわけじゃないん

だけれど、普通の家族間にある無条件の安心感のよつなものが欠けていたように感じられた。

その原因は、たぶんお兄ちゃんが養子といつてあつたんだろう。

う。

だけど問題はそこじゃなかつた。もしかしたら……それをもたらしたのは、あたしなんじやないんだろうか。

お兄ちゃんは、子どもが欲しくてもできないから養子に迎えられた。でも、あたしが生まれてしまつた。血のつながらない養子と待望の実子。お父さんとお母さんの愛情は、どちらにも傾くことなく平等に注がれたんだろうか？

あたしはお兄ちゃんが大好きだつた。お父さんよりもお母さんよりも　だれよりもそばにいて、あたしのことを見てくれていたお兄ちゃんが、大好きだつた。

でも、お兄ちゃんは？

お兄ちゃんはあたしのことをどう思つていたんだろう？　いつも見せてくれていたあの笑顔の下で、何を考えていたんだろう？

怖かつた。

背筋がぞつとして、体中から血の気が引いた。今すぐこの世から消し去られてしまうような恐怖に心臓が縮んだ。

だから……手紙を書いた。絵はがきが送られてくるたびに、たくさんたくさん手紙を書いた。恐怖に呑みこまれたくない。疑惑を確信に変えてしまいたくなくて。あたしだけに送られてくる絵はがきをよそぎに、お兄ちゃんの心を信じたくて、必死に。

それは傍から見ていて、たゞ滑稽だつたろう。

お兄ちゃん。

あたしの心は届いていた？　伝わっていた？

お兄ちゃんの心を信じてもいい？

……お兄ちゃん。

会いたいよ、無性こ。

4 宿にて

お兄ちゃんが暮らしていた街は海のそばにあった。

田高さんの知り合いが営んでいたところの旅館も、歩いてすぐのところに浜辺がある。ちょうど今の時期は海水浴客で賑わっているらしい。確かに旅館は満室状態で、小さいながらもふた部屋取れたことは奇跡に近かつた。

あたしが泊まる部屋は浜辺に面していて、窓を開けると、墨をこぼしたような闇の向こうから波の音が聞こえてくる。あたしは転落防止の手すりに寄りかかり、近づいては遠ざかる海の声に耳を傾けていた。

潮の香りを運んでくる風は冷たく、べたついていた。髪や肌が痛むと言つて海風を嫌がる人もいるけれど、あたしはそんなに嫌いじやなかつた。鼻につんと来る塩辛いにおいは、海にやつてきたんだつていう実感を湧かせるし、ひんやりとした冷たさは真夏の陽射しに灼けた肌には心地よかつた。

お兄ちゃんも海が好きだつた。

風景画を描くとき、題材はほとんど海だつた。よく晴れた日の、透きとおるようでいてどこまでも深い、青い青い海。突き抜けるような蒼鷹の下に広がる海原は、紙の上に描かれた絵に過ぎないはずなのに、本当に波の音が聞こえてくるよつだつた。

海を見ると懐かしくなるんだ

できあがつた絵を見つめながら、ぽつりと呴いていたことがあつた。

どうしてかな……ともそこへ帰りたくな

帰りたい場所。

帰りたいと思つ場所 帰るべきといふ。

お兄ちゃんの『帰るべきところ』は、あたしたち家族の許じやなかつたんだろうか。だから帰つてこなかつた?

「……わかんないや」

考えても考えても答えにたどりつけない。まるで迷路の中を、出口を求めて歩き回っている気分。

思考の堂々めぐりに陥ってしまったあたしは、手すりの上に重ねた腕に顔を埋めた。なんだかもつ、いろんなことが嫌になってしまつた。

ふと、閉めきられた襖戸の向こうから声がかけられた。

「一美花ちゃん、ちょっとといい?」

「あ、はい。どうや?」

あたしは慌てて返事をした。

一拍置いて、静かに襖戸が開けられる。現れたのは日高さんとその後ろにもうひとり、はじめて見る男の人。

「急にごめん」

「いいえ」

女のあたしの部屋に入るのにためらいがあるのか、日高さんたちは出入り口に突っ立つたままでいた。あたしが部屋に入つてもううよつ言つべきか否か迷つていると、男の人が日高さんの肩越しにひょいつと顔を覗かせた。

「きみが一至の妹さん?」

「え? はい、そうですけど……」

お兄ちゃんや日高さんと同じか、もう少し上くらいだらうか。短く刈つた髪を薄い金色に染めて、両耳に銀のピアスをいくつもくつつけている。こんがりと焼けた浅黒い肌が、いかにも海辺育ちっぽい。

彼は一瞬目を瞠つたあと、感心したような声を洩らした。

「いやいやいや……ホントそっくりだねえ。まさか、ここまで似てるとは思つてなかつたよ」

「え?」

なんのことかわからず田を瞬かせていると、日高さんが男の人の肩を小突いた。

「おい」

「あー、『ごめん』『ごめん』。つい、ね」

似ていて、いつたいどういうことなんだろう？　お兄ちゃん
と……というわけではないと思つ。昔から、似ていてるなんて一回も
言われたことがない。血がつながっていないんだから、あたり前な
んだけれど。

そんなことを考えていると、男の人にっこりと笑いかけられた。
なんとなく近寄りがたい印象なのに、思いがけず人懐っこい笑顔だ
った。

「はじめまして。俺、真柴康多。ましばこうたこの旅館のひとり息子で、徹や
一至の大学の同級生。よろしくね」

『旅館を営んでいる知り合い』といふのは、この人のことだったの
か。ということは、今日この旅館に泊まれたのは彼のおかげなのだ。
あたしはぺこりと頭を下げた。

「杉村一美花です。今日は泊めていただいてありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして」

見かけによらず……って言うと失礼だけれど、意外と気さくな人
らしい。ほつとしたあたしは、無意識に強張らせていた肩の力を抜
いた。

「こいつが一美花ちゃんに会いたいって急に言い出すもんだから」
真柴さんを睨みつけながら、日高さんは呆れたように言った。す
ると、真柴さんは大袈裟なほど悲劇的な顔をしてみせた。

「なんだよお、俺だつて興味あつただもん。あの一至の妹にい
「他人様を珍獣みたく言つな！　ってかそのしゃべり方やめろ！
氣色悪い！」

「うわっ、ひつでえ。徹つてば～」

……仲いいんだなあ。

生あたたかい気持ちでふたりのやりとりを見つめていると、ハッ

とした日高さんが慌てたように咳払いをした。

「えつと、それで明日のことなんだけど。こいつが病院まで、車で

連れていかう

「そういふこと。まあ、まつかしいといて」

「あつ、はい。わかりました。よろしくお願ひします」

明日。

明日、綾羽さんに会つ。お兄ちゃんの遺したものを受け取るために。お兄ちゃんの本当の心を確かめるために。すべての決着がつく。さう思つと、心がすうっと冷えていった。

お兄ちゃん。

あたし、行くよ。綾羽さんに会つよ。お兄ちゃんが愛した人に。

……ちょっとだけ、怖いの。

お兄ちゃんがあたしをどう思つていたのか、知るのが怖い。

でもね。

それでも、それでも知りたいから。だから、あたしは行くよ。

闇の向こうから聞こえてくる波の音が、いつまでも耳の奥で鳴り響いていた。

5 それは、偽つてこのわの(一)

昔から病院とこいつといふはあまり好きじゃなかつた。まるで水底にいるよつたな静けさ。薬品のにおいが混じつた、ひんやりとした空氣。陽が射しているのにどこか薄暗い廊下を歩いていると、だんだん息苦しくなつてくる。

「一美花ちゃん、大丈夫？」

隣を歩く日高さんが顔を覗きこんできた。

「え？」

「なんだか顔色が悪いよ。わざわざからずつと黙りつ放しだし」

「……ですか？」

だから顔が近いんですねー。

氣遣わしげに訊いてくる日高さんに曖昧な笑顔を返しながら、あたしはさりげなく彼と距離を取つた。

癖なのか、日高さんは人と接するとき、相手の距離をあまり考えていないことが多い。今だつて間近で見つめたりする。しかも無自覚だから尚更たちが悪い。

「まあ確かにこんな、心氣くせえといこいれば気持ち悪くもなるよなあ」

あたしたちの後ろを歩く真柴さんが、なぜかにじやしながら笑いた。日高さんは眉間に皺を寄せた。

「おまえな、そういうのいじつたなよ。……なんだよ」

「別にい？」

にやにや笑いが更に深まる。……明らかに「別に」という顔じゃない。

日高さんは何か（たぶん文句を）恤ねつとして、結局、長いため息をひとつ洩らした。

「……おまえと話してると、ホント疲れる」

ちよつぴり同意したくなつたのは、真柴さんには内緒だ。

やつこつしてこるひめ、目的の病室にたどり着いた。スライド式のドアの横のプレートには、『407号室 杉村綾羽』の文字。受付で確認したとおりの部屋番号だ。

着いてしまった。とうとう来てしまった。

さつきの会話で浮いていた心が、一気に重くなる。なんだかよくわからない、いろんな感情が入り混じったものがこみ上げてきて、喉の奥が嘔吐したあとのよくな、いやな感じになった。

だけど、行かなくちゃ。

日高さんがドアをノックする。

「綾羽さん、徹です。康多と……」美花ちゃんを、連れてきました「しばらしくして、やわらかな女性の声が返ってきた。

「どうや

心臓がとどろいた。

このドアの向こうに、お兄ちゃんの奥さんがいる……。

「失礼します」

田高さんの手がドアにかかり、そして 開かれた。

あまり広くない個室だった。陽が射しこむ大きな窓があり、磨いたように青い空と お兄ちゃんが好きだった、真夏のきらめく海が見える。そのそばに置かれたベッドの上にいる線の細い女性と、視線が絡まった。

彼女の顔を田にした、その瞬間。

あたしは どうしようもないくらい、泣きたくなってしまった。

「…………はじめまして」

彼女も同じだったのだろうか。

その色の白い、……あたしとやつくりな顔に、涙を堪えるような笑みを浮かべた。

どうしてだね?。あの、小さな頃にお兄ちゃんと交わした約束を思い出す。

じゃあ一美花が大きくなつて、ちゃんとおとなしくしてられるよになつたら描いてやるよ

お兄ちゃん。

お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん。

「一至くんの妻の……杉村綾羽です」

どこか、遠い場所で。

今、一番聞きたい声が、呼んでくれたような気がした。

5 それは、偽りと云ひ難い（2）

同じ顔の人が田の前にいるつてこいつのは、なんだか奇妙な気分だつた。

綾羽さんはあたしよりもずっと年上で（たぶんお兄ちゃんと同じ年くらいだ）、病人だからか、折れてしまいそうなくらい華奢だった。髪の長さも違う。でもその顔立ちは、まるで鏡に映したようにあたしと似ていた。血のつながりがないのが不思議なくらいだ。

この街へ向かう電車の中で見た日高さんの複雑な表情、昨夜の真柴さんの発言の理由がやっとわかつた。

「……びっくりしたでしょ？」「

パジャマの上に薄手のカーディガンを羽織った綾羽さんは、困つたように微笑んだ。なんというか、あたしよりもずっと優しい表情をする女性だ。

あたしと日高さんと真柴さんは、病室に備えつけられていたパイプ椅子を引っ張ってきて腰かけていた。綾羽さんは上体だけ起こして、枕をクッション代わりに背中に当てていた。

開け放された窓から生ぬるい風が吹きこんでくる。そこに潮の香りを見つけることはできなかつた。

「わたしも、知っていたけど、驚いたわ。こんなにそつくりだつたなんて……」

ため息をつくような声。あたしはきゅっと拳を握りしめると、綾羽さんに尋ねた。

「あの」

「なんでしょう」

「知っていたつて……兄は、その、あたしと似てるつてこと、言つてたんですか？」

隠していたばかり思つていた。だって……普通は言えないじやない。あなたは私の妹にそつくりなんです　なんて、そんなこと。

だけど、綾羽さんの答えは違っていた。

「教えてもらいました、何もかも。最初から、出会ったばかりの頃に」

それは。

彼女はいつの間にか、自嘲するような笑みを浮かべていた。

「一美花さん。わたしは……あなたの身代わりだったんですよ」

身代わり。

聞き慣れないその言葉に、あたしは思わず息を詰めた。

「一至くんの心は、いつもあなたに向いていました。わたしが入りこむ隙なんてないくらいに。彼はわたしを通して、あなたを見ていました。でも、わたしはそれでもよかつたんです。わたしは一至くんを愛していたから」

綾羽さんは、そつと手を伏せた。色素が抜け落ちたように青白い頬に落ちる睫毛の影は、あたしよりも長かった。

「妹さんの代わりでもいいからそばにいさせてほしいって、わたしから言つたんです。彼は優しいから……そしてあなたの面影を求めていたから、わたしの願いを聞いてくれたんだと思います」

そんなの。

そんなのって、あんまりだ。

悲しくて、虚しいだけじゃない。そばにいたって、苦しくて、つらくて、傷つくだけじゃない。

それなのに、どうして？

「……兄は、あなたを愛していたんじゃないんですか」

掌にぴりっと痛みが走った。拳を強く握りしめすぎていたせいで、伸びた爪が皮膚に食いこんで血が滲んでいた。

「一美花ちゃん、手……」

それまで黙っていた田高さんが驚いたような声を出した。

「大丈夫です」

我慢できないほどの痛みじゃない。みんなの目から隠そうと手を引っこめようとしたけれど、それよりも一瞬早く、綾羽さんに手首

を掴まれた。

「ちやんと手当しなきゃダメよ

彼女はまるで自分が怪我をしたような顔をしていた。

「康多くん。床頭台の一番下の引き出しに救急箱が入ってるはずだから、取ってくれる?」

「おつけー

真柴さんはひょいと椅子から立ち上ると、言われたとおりに引き出しを開け、小ぶりの救急箱を取り出した。

「あいよ

「ありがとう

綾羽さんは救急箱を受け取ると、中から消毒液と絆創膏を取り出した。床頭台の上のティッシュを取り、傷口の周りを拭つてから、容赦なく消毒液をぶっかける。

「いっ……！」

さつきよりも数倍の痛みに、思わずあたしは声を上げた。綾羽さんはできぱきと手当を進め、最後に大判の絆創膏を貼った。

「はい、終わり

「あ……、ありがとござります」

「どういたしまして」

救急箱の蓋を閉めながら、彼女はにっこりと微笑んだ。だけど、たちまち陰りを帯びる。その視線が再び下に向いた。

「さつきの質問、まだ答えていませんでしたね」

綾羽さんは救急箱の把手を指先でいじりながら、呟いた。

「……その愛はきっと、わたしの欲しかったものじゃありません。だって一至くんが『愛していた』のは、あなただもの」

愛していた。

その意味を自分自身に「」まかすことは、できなかつた。

「あなたに、お渡しするものがあります」

綾羽さんは顔を上げると、あたしをまっすぐ見つめて言った。

「受け取つてもらえますか?」

それは質問じゃなくて確認だった。

「 はい」

あたしは頷いた。

6 果たされた約束

綾羽さんに手渡されたのは、一通の手紙とひとつのかわいいキャンバスだった。

飾り気のない封筒の表には、懐かしい筆跡で『一美花へ』と書かれている。裏をめくると『一至より』の文字。お兄ちゃんからの、最後の手紙だ。そしてキャンバスには。

「これ……」

あたしは言葉を失つた。

そこに描かれていたのは、ひとりの少女だった。入道雲が浮かぶ夏空と波頭のきらめく海をバックに、屈託のない笑顔をこちらへ向けている。彼女が立っているのは波の打ち寄せる白い砂浜だ。

少女は、あたしと同じ顔で笑っていた。

「……綾羽さん？」

「いいえ、これはあなたです。ちょうど同じ年頃でしょう？」

確かに、言われてみれば少女は十六歳。あたしの年齢ぐらいに思える。その笑顔も、綾羽さんが浮かべるガラス細工のように纖細なものじやなくて、年相応の快活な表情だった。

「向日葵みたいだね」

あたしの後ろからキャンバスを覗きこんだ日高さんが、ぽつりと呟いた。

「その絵は、一至くんがわたしを参考にして描いた、あなたの肖像ポートレート画です」

綾羽さんの言葉に、あたしはハッと息を呑んだ。

彼女はほのかな笑みを浮かべた。それは過去を懐かしんでいるようにも、悲しんでいるようにも見えた。

「わたしと一至くんのはじまりは、それがきっかけだったんです。

『モデルになつてくれないか』って声をかけてきて……。彼が本当

はだれを描こうとしていたのかを知ったのは、ずいぶんあとになつてからですけど」

「……約束したんですね」

あたしはぎゅっとキャンバスを抱きしめた。

目の奥が熱い。じわりと視界が滲んで、歪んでいく。

お兄ちゃんの死を知った瞬間凍りついたものが、ゆるゆると溶かされていく。まるでキャンバスが燃えているようじ、その熱に冷たい氷は崩れて、溶け出した水は涙になつてこぼれ落ちた。

「いつか、あたしが大きくなつたら……絵を、描いてくれるつて……」

最後は言葉にならなかつた。

唇が震える。喉の奥が引きつって、掠れた嗚咽がこぼれた。
ずっと、ずっと不安だつた。

お兄ちゃんはあたしのことをどう思つていたんだろう。嫌いだつたんじやないか。憎かつたんじやないか。お兄ちゃんの居場所を、あたしは奪つてしまつたんじやないんだろうか。
だから、……家を出たんじやないんだろうか。

怖かつた。

気まぐれに送られてくる絵はがきにすがるように、たくさん、たくさん手紙を書いて。お兄ちゃんにあたしのことを知つてほしくて、嫌いになつてほしくなくて。

だつて、あたしは。

あたしは、お兄ちゃんのことが、好きだから。
お兄ちゃんのことが、大好きだから。
ねえ、お兄ちゃん。

今ならわかるよ。

あたしはずつとずつと昔から、あなたに恋していただんだ。その優しさに、その笑顔に、そのぬくもりに、恋していただんだ。
だからこんなにも、あなたがいなくて悲しい。さびしい。
涙が止まらない。

ねえ、お兄ちゃん。

なんで死んじゃったの？ なんていなくなつたの？ なん
で 何も言つてくれなかつたの？

お兄ちゃん。

お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん……お兄ちゃん。

どうした、一美花

思ひ出のなかの、お兄ちゃんが甦る。

幻だつていい。

お兄ちゃんに会いたい。声が聞きたい。抱きしめたい。
でも 叶わない。

窓から吹きこんでくる風が頬を撫でていく。それはビック、もつ
一度と触れることない、お兄ちゃんの指先のようだ。
あたしは小さな手のよどみ、声を上げて泣いた。

7 「だから、言わない」

『一美花へ』

おまえにこうひつやつて手紙を書くのは、これがはじめてだな。

俺はあんまり文章がうまくないからさ。どんな言葉を選べばいいのかさっぱりわからない。だからいつも絵はがきになっちゃう。

おまえはたくさん手紙を書いてくれたのにな。おまえのこと、親父のこと、おふくろのこと。学校のこと、友達のこと、先生のこと。いろいろなことを書いてくれたよな。一生懸命書いてくれたんだろう? 嬉しかった。

おまえが俺を忘れずにいてくれて。おまえの成長を知ることができて。本当に本当に、嬉しかった。

なあ、『一美花。

俺はどんなにおまえに救われたんだろう。どんなに癒されたんだろ。言葉じゃ言いくせないくらい、俺はおまえの存在に助けられて、支えられて、生きてるんだ。

……何を勝手なことを言つてるんだと、おまえは怒るかもしれない。

それでもかまわない。この手紙は俺の血に満足な懺悔だ。破り捨ててもいい。燃やしていい。だけど、わがままを言つてもいいなら、どうか最後まで読んでほしい。

『一美花。

おまえが生まれたときのこと、今でもよく憶えてるよ。その年はいつもよりあったかくて、まだ二月なのに桜の花が満開だった。おまえの生まれた病院に大きな桜の木があつてな。病室の窓からきれ

いなピンク色がよく見えたんだ。『まるでお祝いしてくれてるみたいですね』って、看護師さんが笑つてた。

俺は、生まれたばかりのおまえが、憎くてしうがなかつた。小さなおまえを抱いて幸せそつた親父とおふくろが、恨めしくてたまらなかつた。

『一美花、俺はな。俺は、おまえの本当の兄貴じや、ないんだよ。とつぐに知つてるかもしないな。おまえももう十六なんだから。俺は養子なんだよ。六つのとき、親父とおふくろに引き取られたんだ。

本当の両親は、俺が三つのときに交通事故で亡くなつた。顔はぼんやりとしか思い出せない。でも優しい人たちだつたような気がする。

両親には身寄りがなかつたみたいだつた。引き取つてくれる親戚もなくて、杉村の家にもらわれるまで俺は施設で育つたんだ。

施設にいたのはたつた三年間だけど、あんまり思い出したくないな。周りになじめなくて、いつもさびしくて泣いてばっかりだつた。……杉村の家に養子に行つても、それは変わらなかつた。

親父とおふくろには本当に感謝してる。血のつながらない俺を育ててくれて。なんにも恩返しきれないまま勝手にくたばつちまつて、本当に申し訳ないつて思つてる。

俺は親父とおふくろのことを『両親』だつて、ずつと認められなかつた。

俺にとつての『両親』は本当の父さんと母さんだけなんだ。臍げにしか憶えてなくとも、俺の心のなかには確かにふたりがいるんだよ。

だから いつもどこかが噛み合わなかつた。

お互に家族になろうとしても、完全にはなりきれなかつた。俺が最初から一線を引いてたせいで、親父たちも踏みこむことができなかつた。

失敗してたんだ、俺たちは。

それでも、おまえが生まれるまでの四年間はまだなんとかなった。
きこひなくとも『家族』つていう形を取り繕うことことができた。親父
とおふくろの優しさや愛に、甘えたり、応えたりすることができた。
だけど、おまえが生まれて。

状況は変わった。親父とおふくろは俺もおまえも同じくらいかわ
いがつてくれたけど、でもやっぱり違つんだ。日に見えるような、
形のはつきりしたものじゃなくて、何げない態度とかかける言葉と
か、そんな小さなことから伝わってくるんだ。養子の俺よりもあき
らめてた矢先に生まれたおまえのほうが、何倍も大事にされてるん
だつて。

俺はおまえを妬んだ。俺から仮初めの家族すら奪つやつだつて憎
んだ。

本当に勝手だらう？ 自分から『えられた居場所を捨てておいて、
居場所を奪つただなんて考えて。本当に、呆れるくらい自分勝手な
やつだ。

そして卑怯だ。

俺は子どもが欲しくてもできないから、親父とおふくろに引き取
られたんだ。それなのにおまえが生まれちまつた。もう必要ないつ
て捨てられるかもしね。そんな不安や恐怖が頭から離れなかっ
た。

俺は本心を親父たちに悟られないよう、今まで以上に『いい子』
を演じた。賢くて素直な、理想を絵に描いたような『いい子』をな。
赤ん坊だつたおまえの面倒も、自分から進んで見たよ。それこそ、
おむつ替えからミルクを飲ませてやることまで、なんでもやつた。
小学生で離乳食が作れたやつなんて、俺以外にはそつそつといふと
思うぞ？

そんな俺をおふくろはすっかり信頼して、おまえのことを任せ
きりにするよになつた。俺もいつの間にか、この世で一番『愛い』『
妹』の世話をすることが当たり前になつてた。
そう、当たり前になつてたんだ。

面倒を見るよくなつたばかりの頃、そのふにゅふにゅした首をへし折りたいぐらいだったのに、気づいたら、おまえのことがかわいくてしょうがなくなつてた。

どうしてなんだらうな。

憎くて妬ましくて殺してやりたい、そんなどうどうした醜い感情を抱いてた俺に、なんの屈託もなく笑いかけてくれたからだろうか。薄汚れた俺の指を、小さな手でぎゅっと握ってくれたからだろうか。おふくろでも親父でもなく、一番最初に俺を呼んでくれたからだろうか。

……いや、そうじゃない。もつと根本的な部分で、俺は、浅はかな期待を抱いてたんだ。

おまえは何も知らない。何も知らないからこそ、俺を……必要としてくれるんじゃないか、って。

血のつながりがないことを知らない、俺を本当の兄だつて信じてるおまえになら『家族』として愛してもらえるんじゃないかって……遠い昔に失つちました居場所を、手にすることができるんじゃないつかつて、思つたんだ。

おまえの目に真実は映らない。そうすれば、俺は真実を忘れられた。おまえの兄貴として、おまえのそばにいつまでもいることができる。おまえが俺のすべてだった。おまえが俺の存在理由だった。

幸せだつた。

とても、とても幸せだつた。おまえに頼られて、甘えられて、必要とされて。「お兄ちゃん」って呼んでもらえて。『いい』についてもいいんだつて感じることができた。

おまえが俺のすべてだった。おまえが俺の存在理由だった。

一美花。

おまえはどうして俺が家を飛び出したのかつて思つてるだろ？。こんなにもおまえに依存しておきながら離れたのか、疑問に感じてるだろ？。

美術系の大学に行くか行かないかで親父と揉めたことも、もちろん

んあつた。だけど、何よりも、俺は。

怖かつたんだ。

大きくなつてくおまえを見て、俺はいつしか気づいた。おまえはいつまでも子どものままじゃいられない。いつかは大人になつて、俺を必要としなくなる。俺の知らない世界に飛びこんでつて、手の届かない場所へ行つちまう。俺はそれを追いかけることはできない。

なぜなら、俺はおまえの『兄貴』だから。

やがておまえはだれかに恋をするだろう。結婚して、子どもを産むかもしれない。それはつまり、俺じゃない他の男を愛するつていふことだ。

……そんなこと、考えるだけでも耐えられなかつた。

おまえが俺以外のやつを愛するなんて、絶対に許せなかつた。腸が煮え返るぐらい腹立たしくて、まだいもしないおまえの恋人が、夫が、ハつ裂きにしてぶつ殺してやりたいくらい、憎くて妬ましかつた。きっと赤ん坊のおまえに感じた憎悪や嫉妬よりも、何倍も激しくて深い感情だつた。

そして、そんな自分に愕然とした。

こんなにもおまえに執着してたなんて、これっぽっちも自覚してなかつた。当然のようにおまえは俺のものだつて考へてる自分が、おそろしかつた。

だから逃げた。

このままそばに居続ければ、俺はいつかおまえを壊しちまう。兄弟なんてことにはかまわずに、ただ自分のためだけにおまえを傷つけて、おまえだけには知られたくなかった真実を最悪の形でおまえに突きつけちまう。いや、真実さえも利用して。

そう思つたから　だから、逃げ出した。

おまえを守るために逃げたんだって、そんのは詭弁だ。俺はただひたすら自分のために逃げたんだ。おまえに嫌われたくなくて、憎まれたくない、拒まれたくない。もう一度と修復できない破綻を迎える

るくらいなら、優しい兄貴のまま、おまえから離れるほうがマシだつた。

その、はずだったの。」

「一美花……。俺はぜりしょりもないくらい利口的で欲深い、醜い男だ。欲望に負けて他人を利用するよつな、最低野郎だ。

綾羽は、おまえじやないのに。

俺は彼女の気持ちを利用したんだ。おまえの代わりでもいって、いう彼女の願いを聞き入れるフリをして、本当は、彼女の想いをだにしてたんだ。

おまえの代わりなんて、だれにもできないって、最初からわかつてたのに。

俺は、馬鹿だ。

ごめんな、一美花。

俺は本当に悪い兄貴だ。いや、もうおまえの兄貴なんて名乗る資格はないのかもしれない。俺は、おまえにとつていい兄貴として在りたかったけど……本当は俺のように、おまえのすべてであつてしまつたのかもしれない。

だけど、一美花。

おまえには、俺なんかに囚われずに広い世界を見てほしい。ひつぽけな箱庭なんかじゃなくて、見渡す限りの風景をいつもその目に映してほしい。押しつけられた愛情や幸せなんかじゃなくて、おまえ自身の手で勝ち取ったもので満たされて幸せになつてほしい。だから、この言葉は言わない。もうわかっちゃうかもしれないけど、言わない。それはきっとおまえにとって、余計な足枷にしかならないから。

代わりに、いつかおひ。

幸せになれ。

世界中の人間が羨むくらいの幸運になれ。俺のことなんか忘れちまうくらい、いい男を愛して、家庭を築いて、幸運になれ。

おまえが笑ってくれることが、今の俺のたったひとつの願いだ。

だいぶ長くなっちゃったな。こんなに文章を書いたのは、たぶん生まれてはじめてだ。

この手紙と一緒に綾羽に預けた絵、わかつたか？

約束したからな。
気に入らなければ、燃やすなり捨てるなりしてかまわない。それはおまえの自由だ。

最後に。

ここまで読んでくれてありがとな。親父やおふくろのことを頼む。

それから。

俺は　おまえに出会えて、本当によかったです。

じゃあ、元気でな。

さよなら。

『至よ

一生分の涙を流したような気がする。

あたしは腫れぼったい瞼の下から、膝の上に広げた便箋を見つめた。

ずっと手に持っていた部分にくつきりと指の形が残り、皺が寄つてしまつていて。ところどころインクが滲んだり、うすすらとシミが浮かんでいるのはあたしの涙の痕だ。

何度も何度も読み返した。ひと文字たりとも漏らさないよう。お兄ちゃんの想いを、ひとかけらも取りこぼさないように。この気持ちを、なんて言葉にすればいいのかわからない。これ以上ないうてくらい嬉しいのに、どうしようもくくらい悲しい。時間が経てば経つほど想いは膨れ上がって、抑えきれなくなつて、吐き出さずにはいられない。

今もまた、田の奥がじわりと熱くなつた。あたしは涙がこぼれる前に目を閉じて、ぎゅっと瞼に力をこめた。

「……一美花ちゃん」

心配そうな声で日高さんが名前を呼んだ。

あたしは顔を上げると、手の甲で田元をこすつた。

「あの、さ……」

向かいの座席に座つた日高さんは、まるで怪我をしたような顔をしていた。どんな言葉をかければいいのか迷つていてるようだつた。あたしは「まかすように笑つてみせた。

「じめんなさい、大丈夫です」

「……そつか」

日高さんはそれだけ咳くと、結局何も言わなかつた。あたしには、それがとてもありがたかつた。

病院から宿に戻つてきたあと、もう一泊して翌朝に発つた。真柴さんに見送られながら電車に乗つて。行きとは逆の順に電車を乗り

継ぎ、あと少しであたしの街の駅に着く。

車内はやけに静かで、規則的なレールの軋みだけが響いていた。たまにひそひそと、他の乗客のささやき合う声が微かに聞こえる。

車窓の外は、いつかと同じように真っ暗だった。照明の光を受けて車内の様子がモノクロ写真のように浮かび上がる。

窓ガラスの表面に映る自分と田が合った。

ひどい顔。

思わず笑つてしまいたくなるくらい、情けない顔だった。お兄ちゃんがいたら、「不つ細工になつてゐぞー」って苦笑しながら頭を撫でてくれたかもしねり。

お兄ちゃん。

ああ、もういらないんだって実感するたびに、ぽつかりと胸に穴が開いたような虚しさとさびしさがこみ上げてくる。壊れたものが元には戻らないように、喪われた人は帰つてこない。どんなに田を瞑つて耳を塞いでも、お兄ちゃんの不在は永遠に覆えらない。

残されたあたしに許されたのは、それを受け入れることだけだ。どんなに時間をかけてでも、お兄ちゃんの死を認めて乗り越えなくちゃいけない。生きている限り、あたしは　あたしたちは、前に進まなくちゃいけないんだから。

もう一度便箋に視線を落とす。ずっと求めていた答え。八年分のお兄ちゃんの想いが綴られた、ながいながい手紙。

ずいぶん自分勝手だけれど、こめられた想いの重さも、かかつた年月の長さも、そしてお兄ちゃんの最後の願いも、今のあたしには上手に受け止められない。「幸せになれ」っていう言葉に頷くためには、もしかしたらこの手紙が届くまでの年月……つづん、それ以上かかるてしまうかもしねり。

それでも。

いつか、お兄ちゃんに胸を張つて「あたしは幸せだよ」って言いたい。お兄ちゃんと同じぐらい好きな人と一緒に、いつも笑つてつて報告したい。

それがあたしにできる、お兄ちゃんへの恩返しだから。

お兄ちゃん。

たくさん、たくさん遊してくれて、本当にありがとうございます。あたしも、
とっても幸せだったよ。お兄ちゃんと一緒にいられて、毎日が嬉しくて
樂しくてしうがなかつた。言葉なんかじゃ言いにくくせないぐら
い、幸せでした。

あたしがお兄ちゃんの許に行くのは、ずいぶん先のことになると
思います。だからどうか、気長に待っていてね。

そしていつかそのときが来たら、あたしの話を聞いてください。
あなたへ綴つたラブレターのような、ながいながい、あたしの物語を。

8 ながい手紙（後書き）

Image song

—青窈『ハナミズキ』

ガラスの海（前書き）

旧サイトのWeb拍手で掲載していたSSです。

ガラスの海

はじめて海を見た妹の第一声は、「ガラスみたい」だった。これを聞いた両親は、揃つて怪訝そうな顔をした。それはそうだ。普通、海からガラスを連想したりなんてしない。

「なあ、一美花。どうして海がガラスみたいなんだ？」

親父の問いかけに、それこそ妹は不思議そうに首を傾げた。

「だつてきらきら、おんなじだよ？」

お父さんこそ、どうしてわからないの？ と言わんばかりの妹のまなざしに、親父は心底困ったような顔をした。

けれど、俺にはわかつた。

つい先週の日曜日、両親が留守にしている間に家のすぐ近くでトラックの横転事故があつたのだ。トラックにはガラス板が積まれていて、事故の衝撃で粉々に砕け散つたガラス片が道路一面に散乱していた。

俺は妹を抱いて、一階のベランダからその様子を見ていた。夏の明るい陽射しを弾いて、ガラス片がいつせいに瞬いでいるように輝いていた。よく晴れた日の、波頭がきらめく海のように。

妹はその光景を思い出して、海をガラスのようだと言つたに違いなかつた。

「 そうだな」

俺は妹の頭をひと撫ですると、ぱっちりとした目を覗きこんだ。

「 きらきら光つて、同じだな」

「 うん！」

俺の言葉に、妹は本当に嬉しそうに、まぶしいほど無邪気に笑つた。

その瞬間、圧倒的な歓喜がこみ上げてきた。甘く、やわらかな感情が俺を呑みこむ。氣づくと唇が綻んでいた。

「 一至、一美花が言ってる意味、わかるの？」

田を瞬かせながら、おふくろが訊いてきた。

俺は頷いた。

「わかるよ」

「あら、すいおい。教えてくれる?」

俺はちらりと妹を一瞥した。妹はきょとんと見返してくる。
それからおふくろに向かつて、わざとらしく人指し指を唇に当て
てみせた。

「内緒」

思えば、あのときにはもう、俺は愛と呼ぶにはおじがましい、狂
氣じみたこの想いに囚われていたのかもしれない。

渴望し、だが決して叶わない苦しみを抱え、それでも俺は幸せだ
った。

その事実だけで、俺は充分だから。

だからこそ、本当に伝えたいことは伝えずに行く。

狂おしいほどの想いも、記憶のなかの笑顔も、すべて抱えて還る
う。

いつか見た、ふたりだけのガラスの海へ。

前書き（ひがき）

旧サイトのWeb拍手で掲載していたSSです。

小児な頃、誕生日が近づくたびに何よりも待ち遠しかったのは、真っ赤な苺が乗ったバースデーケーキと　お兄ちゃんからのプレゼントだった。

子どものお小遣いで買えるものなんてたかが知れている。お父さんやお母さんからものに比べたら、本当にささやかなプレゼント。それでも、あたしにとっては一番の贈りものだった。どんなものだつてかまわなかつた。お兄ちゃんがあたしの誕生日を祝つて、あたしのためにプレゼントを用意してくれた。そのことが、嬉しくて嬉しくてしようがなかつた。

お兄ちゃんがあたしの生まれたことを喜んでくれていて。そう思うことができたから。

八歳のときにお兄ちゃんが家を出でていってからは、その形が変わつた。プレゼントの代わりに送られてくるよつになつたのは、お兄ちゃんお手製のバースデーカード。お兄ちゃんの描いた絵と、お兄ちゃんらしい素つ氣ない、けれどあたたかい言葉が綴られた、世界でたつた一枚のカード。

誕生日の朝、郵便受けの中にバースデーカードの入つた封筒を見つけた瞬間の、泣きたくなるような安堵と　歓喜を、今でも憶えている。

ああ、まだ大丈夫。

あたしとお兄ちゃんはまだつながつてゐる。幼い日、誕生日おめでとうつて言つてくれたお兄ちゃんの笑顔を信じていられる。バースデーカードを見つめながら、何度も自分に言い聞かせた。

どうして氣づけなかつたんだろう。

いつも盲目的なまでの、その想いの眞実に。

夏が過ぎ、季節がめぐつて。

あたしはまたひとつ、年を重ねた。

もうお兄ちゃんからのバースデーカードが届くことはない。

ああ、そうかつて気づいたびに、お兄ちゃんの死を思い知らされる。喪失の、途方もない重みを。

お兄ちゃん。

今なら、お兄ちゃんがあのバースデーカードにどれだけの想いをこめていてくれたのか、わかるよ。もしもあの頃理解できていたらあたしたちの結末は、もっと違うものになっていた?

そんなこと、いくら考えたって何にもならないってわかっている。でもね、考えられずにはいられない。

本当に馬鹿だよね。

もう一度と送られてくることのないバースデーカード。

それでもきっと、誕生日を迎えるたびに、あたしは郵便受けを覗かずにはいられないんだ。

夏の果て（前書き）

旧サイトのリクエスト企画作品です。リクエストしてくださった読者の方に捧げます。

夏の果て

夏の空は、ありつたけの青い絵の具をぶちまけたように鮮やかだつた。

さらついた潮風が頬を撫でる。呼吸をするたびに塩辛い香りが肺を満たした。

「お～、絶好の海水浴田和だなあ」

車椅子を押してくれる康多が声を上げた。少し後ろでパラソルを張っている徹が呆れたように尋ねた。

「まさか、水着持ってきたのか？」

「いやいや、そんなナンセンスなことはしねえよ。時代は着衣水泳だろ！」

「……馬鹿だ、馬鹿がいる」

徹ちゃんてばひつど～い、という大袈裟な泣き真似に思わず笑ってしまう。波打ち際に立った綾羽も、白い日傘の下でくすくすと笑っていた。

「いいわね、気持ちよさそうで。わたしも一緒に泳ごうかしり

「マジで？ 大っ歓迎！ って言いたいところだけど、綾羽ちゃんにはゼひビキ……」

「調子に乗るな、このセクハラ親父！」

「スペアン！」と小気味いい音に続いて、派手な悲鳴が上がった。このふたりのどつき漫才は昔から少しも変わらない。

「そう。何も変わっていない。」

徹も康多も、俺がどんな人間なのか知っているはずなのに、変わらぬ態度で接してくれる。綾羽も笑顔を見せてくれる。

「当たり前という、幸福。」

俺には、そんな資格なんてありはしないのに。

「……いいな。俺も泳ぎたい」

群青色の空とともにどこまでも広がる海は、まるで両腕を差しの

べて微笑む母親のようだった。打ち寄せる波の音が、おこでおいでと優しくささやく。

あたたかい水の搖籃^{よじかご}のなかで見る夢は、どんな色をしているのだろつ。

「また、泳げるぞ」

一秒にも満たない沈黙のあと、康多が強い声で言った。震えを押さえこんだような、声。

「現にこうやつて外出許可下りてるだろ？ 最近調子もいいみたいだしさ。まだ夏ははじまつたばつかなんだ。あと何回だつて来れるだろ」

「……ああ、そうだな」

徹が頷く。

「次は泳げるよ。今度はテントとか持ちこんで、みんなで泊まつたりしてもいいよな」

「花火とかな！ ああつと、西瓜^{すいか}割りも忘れちゃいけねえ」

「ふふ、なんだか子どもの頃みたい」

綾羽がくるりと日傘を回す。陽射しに輝くような白と、軽やかな仕種がまぶしかつた。

「海水浴なんて小さなときに一度しか行けなかつたけど、よく憶えてるわ。西瓜割りに挑戦したんだけど、目が回りすぎててんて的外れなの。結局だれも割れなくて、切つて食べたわ」

「そうそう。あれつて結構難しいんだよなー。割つたら割つたでまたビミョーだし」

「確かに、西瓜割りのあとつてかなり悲惨だよな……」

砕け散つた赤い果肉が広がる惨状を想像したのか、徹が乾いた声で呟いた。

まだあの家にいた頃、縁側に並んで食べた冷えた西瓜を思い出す。親父は塩をかけるのがうまいと言つて譲らなかつたが、俺と隣にいたあの子にはとうてい理解できなかつた。

種を上手に飛ばすことができなくて、悔しそうに丸い頬を膨らませ

せていたあの子。

雨のように降り注ぐ蝉の声。田陰に泳ぐ風鈴の音。西瓜の水っぽい甘さ。

隣合づ小ちな体の、熱いほどだつたぬくもり。めまいのような感覚に、俺は固く田を閉じた。

「一美花。

俺の妹。俺の世界。俺のすべて。

罪深いほど恵まれているくせに、俺が満たされることはない。徹にも康多にも、綾羽ですら一美花の代わりになどなれない。偽りでもかまわないとほざいておきながら、醜悪で貪欲な本性はいつでもあの子を叫んでいた。

「一美花が欲しい。一美花でなければ駄目なのだ。

友人たちの優しさである子の思い出をなぞつてしまつ。綾羽の表情に、声に、成長したあの子の幻を探してしまつ。

「一美花、一美花、一美花！

徹に、康多に 綾羽に。おまえたちに会つために生まれてきたんだと笑つて言えたら、どんなによかつただろう。この想いを忘れてしまえば、だれもが楽になれるのに。目も耳も塞いで、それでも追いかけてくる面影すらいとおしい。「一至くん、どうしたの？」

そつと瞼を押し上げると、気遣わしげに見つめてくる綾羽と田が合つた。

「……なんでもないよ」

妻に重なりかけた姿を「まかすように微笑む。風が強くなり、いっそう潮の香りが濃くなつた。

「康多、せつかくだから波打ち際まで行つてくれないか

「オッケー オッケー、任しつきんしゃい

「タイヤを砂にはめるんじゃないぞ」

「……徹ちゃん。きみは俺をなんだと思つてるのかね？」

砂浜に笑い声が弾ける。まどろみを誘うよつな波の音に重なるそ

れが、ひどく心地いい。

心のどこかは常に渴き、飢えている。もう届かない存在を求めて
さまよっている。

けれど。

「ほい、つと」

ゆづくじと海が近づく。タイヤが波に触れるか否かのぎりぎりで
止まる。綾羽が日傘を差してくれた。

「まぶしいでしょう

「……ありがとう」

彼女の向こうで、きらきらと海が瞬く。

けれど、愛していないわけではない。俺は幸せだ。

それだけは、嘘ではないから。

夏の空、夏の海。心まで真っ青に染まるような美しいブルー。
俺が残せるたつたひとつのみ実を置いていく。

一度とめぐることのない、最後の夏に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9074a/>

Love letter

2011年5月2日20時58分発行